

福島原発過酷事故から1年 —絶望から再生へ／フクシマからのメッセージ—



吉野裕之（よしの ひろゆき）

震災前から環境や平和を考える市民団体に所属。震災以降、避難所支援などを通じてNPO職員に。現在は主に子ども支援策として「保養プログラム」や「移動教室」の拡充を目指している。福島では行政による除染が進められており、校庭や園庭、公園、宅地の放射線量は少しずつ減少している。しかし生活圏の多くを占める道路、子どもたちの格好の遊び場である草むら、森、山、河原は手つかずの状態。子どもたちは、本来であれば豊かなはずの福島の自然の中で遊ぶことが出来ない。たとえ一時でも制限なく自由に自然の中を走り回れるように、というのが、全国の支援者さんたちのご理解を得ながら進めている「保養」である。妻娘は京都市に避難中。



阿部泰宏（あべ やすひろ）

1986年4月、(株)フォーラム運営委員会入社、1994年3月、フォーラム福島支配人に就任。フォーラム福島は福島市の映画館（6スクリーン）で、1987年7月、開館。商業映画から独立系映画、または一般市民主催の自主上映にも応じている。

映画は娯楽である一方で、観客が幅広い好奇心を育む契機となる“メディア”でもある。また映画館は抑圧された意見、存在に光をあてる“アジール”めいた役割を担うという自覚をもって運営に臨んできた。商業的に成立するかという間尺で判断しないプログラミングをどう商業的に成立させられるかは「文化は与えられるものではなく、自分たちで勝ち取るものだ」という自覚を持った観客とともに考え、行動することから実証できると考えている。

〈その1〉

福島の子どもたちは今どうなっているか —関心をもち続けてほしい—

NPO 法人シャローム災害支援センター
子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク（こども福島ネット）

吉野 裕之

■福島県下の子どもたちの由々しき現状

吉野 皆さん、こんにちは、吉野と申します。

本日はこのような機会を与えて下さり、ありがとうございます。

私は2012年5月1日に発足した「子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク」と

いう市民団体で保養を担当、たくさんの方々に保養のプログラムを説明させていただいています。また被災者を支援する NPO 団体の仕事にも従事しています。

こちらの写真の桜をご覧ください。これは放射能で汚染されてしまった福島市渡利地区にある花見山ですが、2011 年 4 月に撮影しました。たくさん放射能が降り注いだ花見山でも桜の花は綺麗に咲いていますが、2011 年はお花見ができませんでした。踏み固められてしまわないよう山を守るために閉鎖されましたが、花見山は年間 30 万人が訪れる福島市一の観光スポットです。その花見山が閉鎖されたままでは観光業者が困る…という事で、2012 年は山の下の方の広場だけ閉鎖を解き、震災から 1 年を経て観光も再開しました。

皆さんのお手元にもある汚染状況のデータは、右側の円グラフが 2011 年 4 月に発表された福島県の測定データです。福島市を中心に伊達市や二本松市がある県北地域では、99% 以上の校庭で 0.6 マイクロシーベルトと放射線管理区域以上の高い数値が観測されています。これは校庭の中央の地上 1 メートルで計測した数値で、校庭の端っこやブランコの下、花壇の下などのもっと高い数値が出たはずですが。この測定もなかなか実施して貰えず、入学式や始業式と同じタイミングになってしまいました。安全かどうか確認される前に入学式や始業式が行われたことに非常にショックを受け、行政のスタンスに疑問を抱かずにはいられませんでした。放射線管理区域には専門に学んだ人しか入れない、18 歳未満は労働禁止、飲食や就寝禁止など規定があるのに、そのレベルを遙かに超える所に子どもたちが通学している…それが当時の状況でした。

■保護者による市民団体の立ち上げへ

こういった状況に不安を抱いた私たち保護者が呼びかけ合い 5 月 1 日に集まったのが、「子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク」設立の会でした。あまりアナウンスできなかったんですが、口伝てに情報を得た方々が全国各地から 250 人も集まって下さり、会場に入りきらない程の熱気でした。私たちはまず「測定して除染する班」「避難、疎開、保養を考える班」「身体の防護を考える班」、そして「情報の収集・発信をする班」という 4 つのグループを作りました。

左上の写真が設立の会に集まったメンバーで、一番上が中手聖一初代代表と佐藤幸子二代目代表です。

右上は私も参加した「避難、疎開、保養班」の最初のミーティングの写真で、この後「みんなで考え動いていこう」というイベント「生活村」を定期的に開催しました。

左下は「測定して除染する班」につめかけた市民の方々です。マスクをしている方もたくさんいらっしゃいますが、この時は「測定はどのようにするんですか?」「測定器を貸して欲しい」「うちの園庭を何とか除染したい」といった相談が寄せられ、みんな手探りで除染をしていきました。

右下は 5 月中旬にフランスの環境保護 NGO「クリラッド」の所長さん以下数名が食品の放射能検査のために測定器を持参し、「レクチャーしましょう」と初来日して下さった時の様子です。この時に貸与して下さった検査装置で住民が持参する家庭菜園の野菜等の数値を測定していました。これが「測定班」の始まりで、現在は「CRMS= 市民放射能測定所」として独立しています。

CRMS が手掛ける「市民科学者会議」は、放射線内部被爆に関する影響を重視し、賛同して下さる世界中の科学者に声をかけ市民会議に参加していただくという形で、昨年に続き今年も猪苗代町での開催を予定、現在準備を進めています。自分たちの関心の強い場所に集まり自分たちで何ができるかを考え、専門家に参加や助言をいただいています。測定器メーカーの社長さんが寄付して下さった測定器を市内のパン屋さんに預かっていただき、貸し出しのステーションを設けるなど、実は行政よりも早い段階から動き始めていました。

右上は6月上旬に開催された「避難、疎開、保養の相談会」の様子です。福島市の施設「A・O・Z（アオウゼ）」で開催しました。当時、自主避難者は補償も何もない着の身着のまままで全国津々浦々まで避難先を探し求めていましたが、全国で避難者を支援する団体が立ち上がりサポートして下さいました。そういったサポートがなければ、見知らぬ土地で生活の不安を解消することもできずに孤立してしまい、精神的に追いつめられる事態に陥っていたかもしれません。福祉の相談会や説明会があると支援者の方々は自費で会場に駆けつけ、「大阪ではこういった受け入れ体制がありますよ」などと助言して下さいました。

こちらの写真には重要な支援者のひとりである京都避難者サポートネットワークの北野さんが写っています。この時、私と北野さんは京都～福島間を往復していた府の災害支援バスに一緒に乗っていました。当時、郡山や会津若松の避難所をサポートする職員さん専用のバスが5日のローテーションで回っており、山田府知事さんの助言で空席に避難者や避難希望で見学をされる方、またボ

ランティアさんが乗せていただけるようになりました。家族に会いに行ったり、用事があって一時的に福島に戻ったりする際に無料で乗せていただけるバスの存在は、不安を抱える福島県民やボランティアさんにとって大変心強いものでした。こういった行政の支援は地域によってバラツキがあり、すごく手厚い所あればもう少しお願いできないものか…という所もありました。京都府、京都市からは非常に手厚いサポートをいただき、私の家族や阿部さんのご家族も山科の市営住宅に避難させていただいています。

■子どもたちの“心”に寄り添って

下の左側の写真は代々木からスタートし東京都内を歩いた「6万人集会」の様子です。

右側の写真は少し緊迫した雰囲気ですが、福島県庁に申し入れに行った際の一枚で、災害対策本部や原子力関係の方、教育委員会の方に来ていただき、「県民にどのような不安があるのか？」というお話をさせていただきました。話はなかなか進みませんが、顔と顔を合わせてお話をさせていただく機会は非常に貴重だったと思います。この日最大の論点は「山下さんはどこから来たんですか？」ということでした。長崎大学の山下俊一教授は「放射能は100ミリまで安全だからあまり心配しない方がよい。心配し過ぎてストレスを溜める方が危険だ」という話をされたがために混乱が生じ、その混乱を今なお引きずっているのです。山下さんは県民健康管理調査の座長でもあるため「信頼感をもって健康調査に応じることが出来ない」という県民の深い疑問があり、行動調査の回答は20数%と30%にも達しません。どのように行動した人にどのような甲状腺の疾患が出る…とい

った照らし合わせができず、このままでは原発の健康被害を科学的に分析するデータが乏しくなり、状況を掴めないまま検査が終わってしまう危険性もあります。最初に山下さんに抱いた不信感が原因で由々しき事態に陥っています。

その不信感を払拭するために頑張ってきたのが、左上の写真の八王子の小児科医・山田先生です。かなり早い段階から「子どもたちを放射能から守る全国小児科医ネットワーク」を立ち上げ、賛同する小児科医を全国から集めて下さいました。その中には心療内科医やカウンセラーの先生もいて、家族に寄り添い相談を受けて下さっています。こちらは甲状腺の触診をしている写真ですが、女の子のお子さんでも安心して診察を受ける様子がお分かりいただけると思います。先生方は一家族に1時間もかけて丁寧に診察して下さいるので、皆さん安心していろんな相談ができます。この写真はその様子を象徴している意味ある一枚です。

■子どもたちを取り巻く高い線量

お手元の表は文部科学省が2011年12月に発表した「年間線量の蓄積、累積」です。福島市には5ミリ以上の場所が半数以上ありますが、先ほどお話した「0.6マイクロシーベルト×24時間×365日＝年間5.2ミリ」が基準となり、年間5ミリ以上被爆して癌や白血病になった場合、原発で働いていた方などには労災があります。しかし、子どもは大人よりも3～10倍も放射線に弱いとされていますから、原発などで働く成人の値を子どもにあてはめる事はもちろんできませんし、子どもにかかる負担の大きさへの不安が私たちの中には強くあります。

こちらは放射線業務従事者が受けている放射線量のデータです。2008年のデータで7万9,700人の累積被爆量の平均は1.1ミリしかありません。1980年の約3万5,000人の平均値3.5ミリから右肩下がりで下がり1.1ミリになっています。これは恐らく「被爆はできる限り少なくした方が良い」と、例えばコンクリートの構造を厚くする、作業着を良い物にする、1人あたりの作業時間を短くするといった努力の結果だと想像しています。

しかし、放射線を浴びて仕事をしている大人が1.1ミリなのに対して、子どもたちにガラスバッチを配布し積算線量を測定したグラフの青い部分、9・10・11月の3ヶ月間が0.5ミリ、単純に4倍すると1年になるかというとはいかず、2011年の3月は半月で1.125ミリと仮定できますから、それを加えると3.225ミリの外部被爆を受けた計算になります。ガラスバッチは外出時は胸にぶら下げ、寝ている時は枕元にと、24時間ほぼ身につけた状態ですから屋外の空間線量ではなく、子どもが生活する中での線量が分かります。

福島市内の平均的なお子さんで3.225ミリですが、伊達市では1ヶ月で0.6ミリという子どももいますので、年間10ミリを越える子どもがいると想定されます。内部被爆に注意して生活したとしても、外部被爆だけで10ミリを越えてしまう…これも現実です。

この写真は福島駅からすぐ、街の中心部にある“まちなか広場”で、アスファルトの上に簡易舞台が設置されいろんなイベントが行われています。この広場の地上1メートルの所で3月の終わりに計測した線量が0.73マイクロシーベルト、しかし地面に測定器を置くと4.04マイクロシーベルトに跳ね上がりました。ベータ線も拾うため単純にガンマ線

だけの比較はできませんが、4マイクロシーベルトを超える場所に子どもたちが集まり体育座りをするとどうなるか…。今年は既にイベントが解禁されていて、子どもたちが焼そばを食べたりしていますし、これからはテンプルやイスが並べられ夏祭りでかき氷が売られます。セシウムの粒子がアスファルトの目にどんどん蓄積され風が吹けば舞い上がり、子どもはもちろん大人が吸い込んでいく…。こんな状況が福島では続いています。

■原発事故がもたらす健康被害と人為的被害

次に、こういった状況がどのような結果をもたらそうとしているか…ということで、甲状腺や内部被爆のお話をさせていただきます。

甲状腺の検査を受けた子どもたちの中間報告が出ました。3月末までに調べた3万8,114人の中で、5.0ミリ以下の結節や20ミリ以下の嚢胞が認められたA₂判定が1万3,460人（35.3%）、5.1ミリ以上の結節、20.1ミリ以上の嚢胞が認められたB判定が186人（0.5%）もいます。

放射線の影響か否かは今の段階では分かりませんし、嚢胞は水膨れのようなもので「心配ない」とおっしゃる専門家もいますが、結節は癌になる可能性があり注意を要します。次の検査はB判定の186人については機会があればすぐに調べますが、A₂判定の1万3,460人は2年半後まで待つことになっています。

県外の甲状腺の専門医の中には「検査は半年に一度受けた方が状況も分かるので良いですよ」とおっしゃる先生もいますが、県民健康調査では県内の限られた人数の先生がたくさんの子どもを診なければいけないこ

ともあり、順番がまわってこないのが現実です。しかし県民健康調査への不安がある中、保護者の間では「次回の検査をもっと早くした方が良いのでは…」とされています。

所管する環境省に「状況が改善するように指導して下さい」と申し入れています。県「のやっている事ですから…」とオブザーバー的な姿勢を崩してくれません。甲状腺に蓄積されるヨウ素が今はほとんど計測されていないため、2年半で問題ないという見解ですが、セシウムも甲状腺に蓄積されることが分かってきているようです。セシウムは身の周りから計測されており、毎日吸い込んで甲状腺に蓄積されてしまう可能性もありますから、半年に一度は検査をした方が良くと私たちは考えています。

こちらは、バンタジェフスキー氏がチェルノブイリ以降に亡くなった方の遺体を解剖し臓器毎に蓄積されたセシウムを分析したデータです。甲状腺にセシウムがたくさん蓄積され、大人よりも子どもの方が3倍も溜まりやすいという結果が出ています。このように新しい治験がどんどん出ていますが、山下俊一さんはこういったデータを一切採用することなくヨウ素の話をし、「子どもの健康被害は甲状腺だけ」を前提にした県民健康調査を行っている。これが大きな問題なんです。

■現在も進行し続ける原発被害

こちらは「ホコリがどれだけ出ているか」という少し細かいデータになります。左側の表は文部科学省が毎月発表している「福島市内におけるセシウム137の定時降下物」です。ND、ND…と続き時々5.12や4.38があり、真ん中辺りに17や25があり、その後には130や156など三桁の数字があります。これ

は水を張った観測器に入るセシウムの粒子を計測したもので、日によってこれだけ違うということです。観測量が多い日は風が強く道路端に溜まったセシウムが飛ばされたのかもしれませんが…、こういった状況です。

右側の表は、毎月の分布を表しています。2011 年 3 月は 30 万 Bq/km²、4 月以降は 1800 Bq/km² だった数値が随分と下がり、10 月、11 月は 180、202 と下がってきたのですが、2012 年 1、2 月には 1000 Bq/km² を越えています。これまでは大気中核実験が一番多かった 1963 年 6 月、8 月の 550 Bq/km² が最大でしたが、2012 年の 1、2 月はその 2 倍もあり、これからどれだけ舞うか分からない状況です。時々「大気中核実験の時代よりも随分少ないから大丈夫だ」という説明を聞きますが、福島市内には当てはまりません。しかも「現在は大気中にセシウムは拡散していませんから、マスクをしなくても大丈夫」というアナウンスさえされている始末です。風の強い日は特に、子どもを中心に大人もマスクを欠かせないのではと私は思います。

さらに問題の「福島市における特定避難勧奨地点の設定の仕方」です。特定避難勧奨地点とは、「家屋一軒一軒の庭先と玄関先で地上 1 メートルの線量を測定し平均した値が設定値以上であれば避難対象になる場所」を表しています。

これはホットスポットがあることから国が定めた基準に沿って測りますが、伊達市 3.2、南相馬市 3.0、福島市大波 3.5 マイクロシーベルト/h 以上であれば、避難しても国が責任をもつことになります。また、「子どもや妊婦がいる家庭は通常よりも厳しい基準で避難対象に認定しよう」と、地上 50 センチでの測定値が伊達市は 2.7、南相馬市

は 2.0 で認定されました。この基準のおかげでたくさんの家族が避難できていますが、福島市では 2.0 以上の家庭は「優先的に除染します」という判断でした。

伊達市や南相馬市の子どもより福島市の子どもは放射線に強いのか？ そんなはずはありません。でも、伊達市や南相馬市の子どもたちは避難できて福島市の子どもたちにはできない…。子どもの権利に差が生じるのはまったくナンセンスですが、これが現状です。また、元もと 3.0 は放射線管理区域の 5 倍の被爆を容認する事となり、年間 1.1 ミリで暮らす大人の 5 倍を背負わせてしまう事になります。子どもは大人よりも放射線に弱いにも関わらず、これが子どもたちを取り巻く現状です。このように不安な状況にあっても私たちは対応する術がないため、できる人は自主的に避難せざるをえなくなり、現在 7 万人を越える方々が県外に避難しています。

■子どもとその家族の心身を潤す「保養」

それでも避難できない方がたくさん残っていますから、私たちは「保養」を行っています。ある程度連続して保養に出ると体内のセシウムが減っていく「生物学的半減期」として時間を稼ぐことができます。また、外遊びを制限されている子どもたちが屋外で自由に遊ぶことでストレスを解消して貰うことも大切だと考えています。

この写真は私たちが実施した「週末保養」の様子です。皆さんいろんな地域にバラバラに避難していますから友だちと遊べない子どももたくさんいて、子どもたちだけで過ごす時間すら奪われている状況です。保養に出ればたった一泊二日の間だけでも学校の先生や親から解放され、外に出て友だち同士で

貴重な時間を過ごすことができます。山形の廃校になった施設をリーズナブルに貸していただいたり、そば打ち名人に手打ち蕎麦を打っていただいたり。子どもたちを心配する大人たちが「何か出来ることはないか？」と知恵を持ち寄り、子どもたちを支えて下さっている。これが保養の現場で繰り返し広げられていることです。

左上の写真のように芝生の上で自由に遊ぶことは福島市内でも郡山でも二本松でもできていません。ここに子どもたちを連れて行くと子どもたちは必ず「この土は触っても大丈夫？」「雨が降っているから外に出ちゃ駄目だよな？」と聞きます。普段はあまり放射能について口にしません、子どもたちはちゃんと分かっています。「どうしてここに保養に来たのか分かる？」とスタッフが子どもに尋ねてしまったんですが、「心を休めるため」「心を穏やかにするため」と子どもたちは答えていました。私はとてもショックでした。そういう事がしっかりと分かっている、でも口に出せない。「怖いから避難したい」と親に言えない。親が頑張っていることをしっかりと理解しているから、福島で生活するしかない分かっているから…。そんな子どもたちを「せめて保養に出してあげたい」、それが親の気持ちです。「国も県も大丈夫と言っているから大丈夫。避難だ、保養だと騒ぎすぎる方が悪い」とおっしゃる方もいらっしゃいますが、保養であれば気軽に県外に出る事ができます。受け入れ先の方々も頑張っておっしゃっていますし、「福島の子どもたちに何かできた！」ととても喜んで下さっているんです。

こちらは北海道の定山溪温泉の旅館の支配人ですが、満面の笑顔で「うちの温泉によく来てくれたね、ありがとうね！」と最大限

の歓迎をして下さいました。すると子どもたちにも「こんなふうに応援してくれる人が全国にいるんだ」ということが分かります。これもまた非常に大きな経験だと思います。

右下の写真は「アースデイ東京」というイベントに参加させていただいた時のもので、70人もの学生ボランティアの方にサポートしていただきました。子どもたちを小さな班に分け2人ずつ学生ボランティアの方に付いていただき、初対面ですが約3時間広い代々木公園で一緒に遊んでいただきました。学生さんにとっても「良い気付きの時間」となり、「子どもたちは何故保養に来なければいけないのか」「原発事故がどういった問題を抱えているのか」といったことを「自分たちの問題」として考えるきっかけになったそうです。友だち同士の会話でも「この間の子どもたちどうしているかな？」から始まり、自分たちが使うエネルギーと結び付けて考え話し合うことができるようになったそうです。こんなふうに県外の方々にも「子ども」「保養」をきっかけに考えていただくきっかけになっています。

■「保養」「避難」を支える県外サポート

「子どもたちを放射能から守る福島ネットワーク」は福島県内の保護者による非常に小さな団体ですが、県外の理解者たちの熱い思いに支えられています。皆さんの支えがなくなってしまうと、保養、避難のサポートがだんだん下火になり風化してしまい、私たちは行き場がなくなってしまう。

県内に残り続けているお母さんたちもやはり不安なんです。ただ、今年の運動会は、時間は短くなったものの屋外で通常の運動会を実施したところが結構ありました。知人

のお母さんは「運動会でマスクをしていたのはうちの子だけ。暑いのに我慢してマスクを付けている姿を見て泣けてきました。なぜこんなことを子どもに強いらなければいけないのか…」とおっしゃっていました。彼女のお子さんは十分に運動ができないため少し太ってしまい、以前は颯爽と走っていたのに走りにくそうで、しかもマスクを付けて走っている…。その姿を見て泣けてきたと。

「全国の子どもの成長・発達の増加率」では福島県が極端に落ちているというデータが既に出ていて、低年齢児では体重が10%減った子どもが28%もいるそうです。成長に伴い増えるはずの体重が減るのは、外遊びや運動ができず食欲が落ち体重が減っているからです。子どもたちが置かれている状況もまだまだシビアですから、「福島はどんなふうになっているのかな?」「子どもたちはどうなっているのかな?」と、関心を持ち続けていただきたいと強く思っています。

今年の夏も全国各地で様々なプログラムを作っていただいています。京都や大阪をはじめ関西にも福島の子どもたちが保養に訪れると思います。そういった記事が新聞に載っていたらぜひ読んでください。何かご協力いただけることがあったら、ぜひ主催者に電話して下さい。それが主催者の励みにもなりますし、たくさんの方々に支えられている事が分かると子どもたちも安心して「何かあったら京都に行けば良いんだ」と思えます。保護者が一緒に来ていたら京都の良い雰囲気が分かり、受け入れの可能性があることが分かり、もしもの時は京都に連絡すれば受け入れて貰えることが分かると、とても大きな安心材料になります。

今後も「子ども」「保養」をキーワードに活動が続けていきたいと思っています。ぜひ見守って寄り添っていただければ嬉しく思います。

ご静聴いただき、ありがとうございました。

〈その2〉

原発事故は人間の手に負えない —この過酷な経験が無駄にしないほしい—

映画館・フォーラム福島 総支配人
阿部 泰宏

■福島県下における原発被害の相違

阿部 皆さん、こんにちは。本日はお招きいただきありがとうございます。私は、福島市の映画館「フォーラム福島」で総支配人をしている阿部泰宏と申します。

本日は幅広くお話をさせていただきたいと思いますが、あくまで「私」という一福島

市民の個人的な考え、気持ちとしてお聞きいただきたいと思います。

まず、皆さんに知っていただきたいことがあります。先ほど吉野さんがお話をされたレジュメの「福島県の地図」をご覧になっていただきたいのですが、一口に「福島」と言っても本当に広いんです。岩手県に次いで面積があり、県内でも地域性や人情、習慣が異なります。福島県を大きく分けると、県中と呼

ばれる「中通り」、その上の「会津」、下の「浜通り」となり、ちなみに私は県中に住んでいます。皮肉なことにこの三つの地区は今回の原発事故でまったく異なる被害を被っていることを認識して下さい。

原発が近くにある相双、いわき、小名浜といった浜通りは避難区域に指定され、6～9万人もの原発難民を生んだ土地となりました。一方、私が住む福島市から二本松、本宮、郡山といった中通りは避難区域に指定されていませんが線量は非常に高く、法律で定められた放射線管理区域の0.6マイクロシーベルトを軽く超えています。

3月18日だったでしょうか、福島市が初めてモニタリングして公表した数値は20マイクロシーベルトと、とてつもない数値でした。しかし当時はこの数値がもつ意味を分かっていますし、そもそもマイクロシーベルト、ベクレルといった言葉に馴染みがない訳です。そんな中、市民は水を汲みに行ったり、5リットル、10リットルのガソリンを買うために何時間も行列に並んだりしていました。そして会津は、線量は低く自覚症状もありますが、経済的被害を最初に受けました。会津は歴史の町であり観光都市です。福島県は目立たない存在だと思いますが、会津と言えば分かって下さる方も多いはずです。農業などの一次産業と白虎隊、戊辰戦争などで知られる歴史の観光都市ですが、原発事故直後から観光客が激減しゼロに近い数字になりました。風評被害により一次産業とホテル・旅館などの観光業が真っ先に被害を受けました。しかし私は会津や浜通りの方々の気持ちは代弁できません…。あくまで「中通りに暮らす者」としてお話をさせていただきたいと思いますので、そのおつもりでお聞き下さい。

■他の被災県とは異なる「疎外感」の中で

映画は娯楽の一つですが、「炭坑のカナリヤ」と呼ばれています。メディアが取り上げにくい問題を自覚的な監督やジャーナリストの視点を持った映像作家が「映画」という作品にして自主上映する、細々と自費で映画を撮り時には営業活動までしながら上映会を行って貰うなどして問題を共有していただくこともあります。労働環境が劣悪な炭坑で毒ガスが発生した際に鳴くカナリヤのように、表層に出てこない、メディアが取り上げにくい問題を取り上げる役割が映画にはあります。

私たちの劇場は以前から映画監督・鎌仲ひとみ氏の作品を上映しています。10年程前に市民からの要望で鎌仲氏のドキュメンタリー映画『ヒバクシャ―世界の終わりに―』を上映しましたが、この時初めて鎌仲氏とお話をさせていただき、初めて「放射能とは何なのか?」「原発と“原発的なもの”とは何なのか?」を知りました。その後の作品に『六ヶ所村ラブソディー』『ミツバチの羽音と地球の回転』などがありますが、原発事故が起きてから鎌仲氏のフィルモグラフィは様々な所で引く手あまたとなっていますので、お名前をご存知の方や作品をご覧になった方もいらっしゃると思います。

私は災害の中でもなかなか語られない原発や放射能汚染について少しは語ることができたかと思っていますが、福島県は他の被災県とはまったく違う状況だとつくづく感じていますし、ずっと違和感をもっています。どういうふうに表現すれば良いのか分からないんですが…、一言で言うならば「疎外感」。福島は疎外されているという感覚です。

■「3.11」ではなく「3.12」「3.14」

3月11日、私は吉野さんと同様に福島に居ましたが、地震による揺れはとても激しいものでした。これまで25年間劇場を守ってきましたが、休館日以外で休むことは一度もありませんでしたし、停電等の自然災害でも半日あれば復旧できました。しかし今回は3週間の休館を余儀なくされました。

地震当日は、映写機など機材が倒れたりずれたりして、「これはとんでもないことになる…」と直感しました。停電で中々情報が得られず、スタッフが持っていたワンセグで何とか事態の推移を知りました。北から南へ沿岸部が次々と津波に襲われている…。しかし私たちは劇場の復旧にむけ機材を片付けたりお客様の払い戻しをしたり、とにかく事態の収拾に追われていたんです。「沿岸部の方々は大変だ…。私たちは内陸部で良かった」と正直思いました。非常に強い揺れでしたが阪神淡路大震災の直下型とは違う横揺れだったので、幸い福島市内の倒壊家屋はそれ程多くなかったため、沿岸部の酷い被害状況にある意味客観的に見ていました。まさかこの後、これ程の被害に遭うなんて思ってもいなかったんですが、「原発の様子がおかしい…」という情報が流れ始め状況は一変しました。3月12日に1号機が水素爆発を起こし、14日午前11時1分に3号機が爆発、その映像を福島中央テレビが放送しました。あの映像を見た瞬間、「福島は終わった…」と私は直感しました。

事故後2、3日はほとんど何のリリースもありませんでした。県庁が大きな被害に遭い、機材を移動したり災害対策本部の体制を整えたり、大わらわだったと聞いていますが

…。その後「線量が20マイクロシーベルト」という情報が流れてきた時、私が真っ先に考えたのは9歳の娘のことでした。もし家族が妻と母だけだったら、私は動かなかったと思います。娘の存在が、この後の私の行動を後押ししてくれました。

「風評やデマに惑わされないで下さい」そして「直ちに健康に影響はありません」と枝野大臣が言った時、「どう考えてもこの公的なリリースの物言いは変だ」と私は感じました。地震や火山噴火、津波など自然災害が起こった時のパブリックコメントは、「そこまでしなくても…」と言いたくなる程用意周到だったんですが、今回は「パニックを起こさないため、収拾するために言っている」としか思えないものでした。その時私は「私自身の直感」に従うべきだと感じました。私自身は放射能を怖いとはあまり思わなかったんですが、自分に子どもがいることが怖かった。そしてこの感覚が、後の私の決定的な行動力へと繋がっていきました。

3月16日、何とかガソリンを調達し家族と社員を連れて山形の本社に疎開させていただきました。家族はその後、北海道、福島県の喜多方、訳あって沖縄、そして京都と移り住み現在に至っています。先ほど「疎外感」と言いましたが、津波や地震による倒壊の被害もそんなになく福島県の中通りに住む私たちにとって「3.11」はどこかよそごとです。でも、「3.12」「3.14」には皆さんとは違った感覚をもっています。

■不安の中での劇場の再開

3月11日にすべてのインフラが途絶えました。しかし一週間後には電気も復旧し劇場を再開しようと思えばできたんですが、そん

な雰囲気ではありませんでした。娯楽施設はすべて自粛、逃げられる人はみんな逃げ、残った方々も家にこもっていました。戦時中とはこんな感じだったのか…と思うほど何とも言えない鬱屈した雰囲気で、これまで味わった事のない不安を感じました。

3月16日、山形の本社で私は社長に言いました。「福島は終わってしまったので劇場をたたんで下さい」と。社長が「どうなるかわからないが、もう少し様子を見よう」と言っただけだったので何とかりましたが、「原発はどうなってしまうのか…。チェルノブイリのようにになってしまうのでは…」という得体の知れない不安、恐怖心が当初、ぬぐえなかったことは皆さんにも共有していただけたと思います。

しかし2週間後には、チェルノブイリのように原子炉が吹っ飛び大量の放射線が噴出し、100キロ、200キロ圏内の住民が退避するまでには至らないことがみえてきたため、社長に申し出て4月2日に劇場を再開しました。しかし「果たしてここで映画館をやっているのか…？」と自分自身に問う程、町は抜け殻のような状態でした。こんなに不安定な状況下で子どもたちを集め『ドラえもん』を見せて良いのか。オープンできたことはとても嬉しい。「映画館を開けてくれてありがとう。何も楽しいことがなかったのでとても嬉しいです」とお客様は言っただけでしませんでした。これもまた宮城や岩手とは全然違う、まさにジレンマというか何かを失ってしまった…、そんな感覚です。

■福島の映画館でできること

モヤモヤとした感覚を抱く中、東京在住で

郡山出身の映画評論家・三浦哲哉さんから「Image.Fukushima（イメージ福島）」というイベントのお話をいただきました。福島を気にかけて下さっている彼の映画仲間やライター、デザイナーたちが東京に事務局を作り、私もやってみたいイベントのイメージがあったので吉野さんにお声をかけ福島の事務局を立ち上げました。映画をツールにしたゲストトークとお客さんとの意見交換によって見えてくる「福島の現在・過去・未来をイメージしよう」という試みでした。前福島県知事・佐藤栄佐久さん、『「フクシマ」論 原子力ムラはなぜ生まれたのか』著者の開沼博さん、映画監督・鎌仲ひとみさん、「福島は決して楽観できる状況ではない」と福島大学で孤軍奮闘して下さっている石田葉月准教授、吉野さん…と、有名人も知識人も福島市民も分け隔て無くゲストスピーカーになっていただくイベントが2011年8月10日に開催されました。

その後も劇場を核にこういったイベントを行っていったんですが、映画館としての自主企画「映画から原発を考える」も当時話題になりました。ドキュメンタリー映画『100,000 万年後の安全』を皮切りに、（原発ではなく原爆についての映画のため）少し視点はずれますが今村昌平監督の『黒い雨』、政府から禁止されているにも関わらずチェルノブイリ近郊30キロ圏内の村で暮らす人々に取材した本橋成一監督のドキュメンタリー映画『ナージャの村』『アレクセイと泉』、25年も前に撮られた映画で今問われている原発問題を既に追っていたドキュメンタリー映画『あしたが消える どうして原発？』、役所広司さん演じる東京都知事が「都庁の裏に原発を作れ！」と提唱し放射性廃棄物問題を含む「原発的なもの」を暴き出し

た『東京原発』、ドイツの『みえない雲』、『チェルノブイリ・ハート』など様々な作品を上映しました。しかし、上映すればする程どんどんお客さんが減っていく…という傾向も実際に感じました。それはお客さんの映画を観に来る動機が「作品を楽しむ」「作家の考え方を知り、自分のリテラシーに活かす」といったことではなく「How to = 果たして自分はこの町で生きていて良いのか？」だからです。放射能は安全なのか危険なのか、その情報を得たいがために映画を観に来ていたんです。「『Image.Fukushima』のゲスト・玄侑宗久さんがトークショーの際にいみじくもおもしろいことをおっしゃっていました。「福島県民は放射能に関して非常にソフィスティケイティッドだ」と。これは福島県民一人ひとりがセミプロのように放射能に関する知識を吸収したということで、聾啞の方がなぜ手話を覚えるのか、目の見えない方がなぜ点字を覚えるのかということと同じ感覚だったと私は思いました。生きるために放射能の知識を得る必要を皆が感じざるを得なかった。その一つが線量計です。福島県ではこれを持っていたとしても誰も驚きません。むしろ、持っていない方が少数派なのかもしれません。これがあるから生きていけるんです。また、福島民報という地元紙は未だ原発関連の記事が一面を飾ります。しかし、福島県から一歩外に出るとこういった状況はまったく分からないと思います。先ほど吉野さんも紹介されていましたが「どことこの公園が何マイクロシーベルト」「どことこの小学校の校庭が何マイクロシーベルト」いった情報が当然のように事細かく新聞に掲載されている、それが今の福島です。

こういった状況下で生きている私たちは、どこからか何かからか絶えず抑圧を受けてい

ます。互いが互いのスタンスをうかがいながら生きている。例えば「洗濯物を外に干すか家の中に干すか」で、その家の奥さんが自分の仲間なのか違うのかが分かりますし、その家庭のスタンスが見えてきます。「おはようございます。今日はお宅の玄関先は何マイクロシーベルトですか？」といった会話が交わされても誰も不思議に思わない。そんな異常な状況が今も続いています。県外にはまったく伝わっておらず疎外感を感じます。こういった感覚を映画で伝えることが必要かと思ったんですが、1年間活動が続けて出た答えは「映画で人は救えない」でした。でも、先ほどお話しした『ナージャの村』『アレクセイと泉』は、チェルノブイリに近いベラルーシ共和国の小さな村ブジシチュで暮らす知的障害の青年の話なんです。放射能汚染にさらされながらも愚直に生きる青年の気持ちがすごくよく分かる。「私たちと一緒にだ」というんです。

■水俣病と福島原発事故

映画とは関係ありませんが、昨年『白河・水俣展』という意味のある展示会が開催されました。以前京都でも『京都・水俣展』が開催されていますが、フォーラム水俣という団体が開催地の規模に合わせて企画を行い、「水俣病は近代においてどんな意味をもっているのか？」ということを見せてくれる素晴らしい展示会です。

同展は2011年11月に白河市で開催されましたが、これは震災が起こったから開催したのではなく、数年前から白河の実行委員会が準備していたもので、それが震災後という絶妙のタイミングで実現しました。もの凄いくのお客さんが集まり、展示会を見た福島県民

みんなが思いました。「私たちのことだ」と。この町でまともな精神状態で生きていくには「心の拠り所になる言葉が必要だ」と私自身も感じました。水俣病患者の代弁者として水俣病を描いた『苦海浄土』の作家・石牟礼道子さんの作品に救済を求めるといふか…、同調するんですね。これは私だけの感覚ではなく、映画にはそういった力があると。自分たちが原発事故に遭い、放射能にさらされている。映画はそのことから私たちを救ってはくれない。でも、抑圧を受けている人たちの状況が分かる、福島県にはリテラシーがあると。この感覚はそう簡単に県外の人には伝わらないはずで、一人の福島県民と半日以上かけて向き合っていただかなければ、そこでやっと分かって貰えるか貰えないかという微妙な問題です。『「フクシマ」論』の開沼博さんがおっしゃったように「世の中の圧倒的な無理解とは3.11以前の自分だ」と。

原発事故がもし京都で起こっていたなら、逆の立場になっていたと思います。今回の震災で私が学んだのは、人の苦境を理解することは基本的にできない。でも「できない」を認識することからすべては始まる。そして、映画にはそれを伝えることができるのかもしれないと。少し遠回しですが、そう感じています。

福島市にいて、映画館にいて、私にも何かできることがあるとすればそういうモチベーションではないか…と何とかやっていますが、すっきりしている訳ではありません。お客さんを集めてお金をいただいて、お子さんにも見せている訳ですから、矛盾を感じていますし、そこを指摘されると弁解できません。でも、こういうジレンマがあることは分かっていたと思います。

原発事故が起きた時、鎌仲さんの言葉が真

っ先に頭に浮かびました。10年前、彼女は私に言いました。「放射能汚染は徐々に奪っていく。やがて何もかも…」と。まずは経済、そして健康。でも、そんなことはまだどうでも良いのかもしれませんが。一番の問題点は人の心を駄目にしてしまう、繋がりをボロボロにしてしまう、人を疑心暗鬼にしてしまうこと。だから私は、放射能汚染によって将来健康被害が起きる、起きない、そういった問題ももちろん大事ですが、不安にさせている時点で問題だと私は思います。

■日々繰り返されるジレンマ、必要とする救済

原発事故から1年、福島は当時のように怒りが渦巻いている状況ではなくなっています。「人間は慣れる」そして「忘れる」ということ。怒りを持続できないんですね…。これを何とかしなければいけないし、そのために福島県民は県外に出て外界と繋がらなければいけないと。少ないかも知れませんが、耳を傾けてくれる人は必ずいます。そういう方々と繋がった時に私たちは解放されます。救われます。だから皆さん、忘れないでいて下さい、福島市民のことを。福島県民を助けて下さいとは言いません。でも、ほんの少しの気の揺るみで明日またこういった最悪の事態が皆さんに起こるかもしれません。大飯原発の問題も関西の方々は当事者意識がもてないと聞きます。それは当然のことですが、福島を反面教師にさせていただいて「原発事故は起こしたら終わり。元には戻せない」と認識して下さい。

鎌仲さんがおっしゃったように、原発事故には回答がありません。回答がないから質問も成り立たない。補償するから大丈夫、除染するから許して下さい、基準値以下だから安

心して生活して下さいでは、私たちは納得できません。しかし、そんな中でも生きていかなければならないということ自体が、質問にも回答にもなっていないんです。朝起きると「今日、どうやって生きていけば良いか？」と家族で言い合っている。一日中悩み夕方になって悩み疲れて眠る。翌朝起きてもまた、同じ悩みが繰り返される。これこそジレンマだと思います。

■最悪の経験を活かす術を求めて

私は福島が「ゲッター」（収容所）のようだと思う時があります。そこまで強い言い方をしなくても…とおっしゃる方もいますが、自分の傷口を暴き出されるような気持ちになるからそうおっしゃるんだらうと思います。原発事故が人間の手に負えないということは、科学的、技術的にどうこう言う以前に、そういうことだと思います。このことが言いたくて、私は本日こちらに参りました。

私の家族は京都に疎開していますから、家族に会うために月に一度京都に来ています。3月31日までは高速道路が無料でしたから車に荷物を積み、730キロの北陸道を8時間30分かけてできる限り往復していました。その時も「私たちは違うんだ…」と感じたのは、新潟から会津を抜けて石川、滋賀、京都と来るんですが、「海が綺麗だな」とか「このサービスエリアにはこんな店があるんだ」といったことはまったく目に入らないんです。でも、柏崎市と刈羽を通る時には新潟と柏崎市と刈羽の距離の近さに慄然とします。敦賀を通る時に、敦賀原発と琵琶湖はこんなに近いのか…、もし敦賀原発に何かあったら京都は…といったことしか頭に浮かばないんです。風景を楽しんだり、観光気分を味わ

ったりしたいんですが、そんなことにはリアリティがもてなくなっていました。地元のみんなも「そうだよね…」と言いますが、他県の方は意味が分からずきょとんとされます。これが「疎外感」です。これが原発事故の実害だと私は思っています。

京都には福島からやってきたたくさんの人々が暮らしています。皆さんに話を聞いていただきたいと思っていますので、福島の間を助けるのではなくご自分のためだと思って話を聞いていただきたいし、分かっていたきたいと思っています。福島原発事故は水俣病に相当する人類史的な事件です。どうかこの経験を無駄にしないで下さい。

本日はご静聴いただき、ありがとうございます。

【質疑】

司会 ありがとうございます。お二人のお話は皆さんの胸に深く胸に染みたと思います。では、お時間の許す限り皆さんからご質問を受けたいと思います。

質問 事故は現在も継続中と見るべきだと私は考えますが、どうお考えでしょうか？
また災害対応について、被災者を助ける＝災害対応という視点が海外では通常ですが、日本は阪神淡路大震災の際に「震災で自宅を失った場合、住宅の復旧支援は私的財産の補償にあたるため憲法違反だ」という議論まで交わされる始末でした。事実、阪神淡路大震災では国や県、市は被災者の救援ではなく、震災の原因でもある都市構造を上塗りするように、都市改造や産業改造に多くの予算を使いました。福島原発事故についても、新たな公共事業への無駄遣いなどで国家予算を破

続させてしまう懸念が私にはあります。この点についてどのように考えてらっしゃいますか？

阿部 「Image.Fukushima」の実行委員でもあるマスコミ関係者が、福島では話せない、だから渋谷のイベントで話した一件があります。

震災直後、福島中央テレビは福島原発3号機が核爆発を起こした映像を独自の判断で放送しました。あの報道がある意味私たちを救ってくれたんです。映画館の仕事ではメディアや報道関係者と話をする機会も多いんですが、気の置けない仲間がこういうことを言いました。「2号機の格納容器に毎時8.8トンもの水を注ぎ込んでいるのに水位は60センチしかない。4号機の放射性廃棄物プールの耐震強度についても、ほとんど問題視していない。これは人々を不安にさせないようにマスコミの善意として報道を抑えているんだ」と。この状態でもしものことがあったらとんでもないことになる。つまり、まったく収束なんてしていないんです。

昨年、野田前首相が収束宣言をした際に、皆さんも「えっ!？」と思って下さったと思います。「ふざけるな!! どこか収束だ!!」、これが本音です。「収束したんだって、良かったね」と、県外の友人から電話をいただきましたが、とんでもありません。政府のマインドコントロールというのでしょうか…。先にお話した件を公表しなかったこと、そして4月1日が休刊日だったため4月2日の福島民報に掲載された、東京電力の件はぜひ皆さんに知っていただきたい。原発事故からわずか半月の3月31日に、東電は福島原発7号機、8号機の増設計画書を建設省に提出したんです。廃炉にする、しないで大騒ぎしている…

そんな時にです。それは何故か？3月31日が年度末だったから…。東電本店の担当者は上から怒られることを恐れて計画書のファックスを送った。3月31日、あの状況下で…。パブリックな情報ではないので間違っているかもしれませんが、担当者は何度も本店にお伺いをたてたそうです、「本当に提出して良いのか？」と。しかし本店は原発事故の対応に追われ、そんなことにかまっていられません。だから担当者はファックスを送ってしまった。これが後に福島県に知れ、「許せない!」「人としてどうかしている!」と大問題になったんです。担当者個人の問題もありますが、大きな組織になればなるほど強い圧力が働いてもいたのでしょう…。

少し話が逸れましたが、2号機と4号機について関係者は、いかに大変な事態なのかが分かっています。政府が4号機をマスコミに公開したのは「何とか抑えないといけない」と考えたから。その場に居た関係者は「これは水素爆発と違うのでは…？」と驚いたようです。「これが水素爆発ならとんでもないことだ」と。今回の原発事故で流出した放射能を出力に換算するとどうなるのか。皆さんあまりお聞きにならないと思いますが、ペットボトル数本分のわずかに5キロ程度、セシウムは4700グラム、プルトニウム238は0.03グラム、プルトニウム239は1.4グラムだそうです。それが空气中に拡散され、これ程までに放射能汚染を広げてしまったんです。

また映画の話になりますが、1945年以前まで映画での凶悪とは宗教上のサタンや宇宙人でした。でも第二次世界大戦後に映画監督が手に負えないものとして取り上げるのは原爆や放射能へと変わりました。この事実一つを聞いても、放射能は人間の手に負えるものではない、扱ってはいけないものだと理

解すべきです。

除染や瓦礫に関しても質問をいただきましたが、福島で除染を信用している人はほとんどいません。何度も繰り返さなければ除染の効果は表れませんし、ゼロになるなんてあり得ないと私たちは思っています。以前大矢野先生たちが福島に来られた時に言いました。「科学的技術や知見を追求する以前に、除染には理念や哲学が必要です」と。一方、うちに出入りしている業者さんが本音を言って下さいました。「原発事故以前まで建設業は本当にかつかつで大変でしたが、事故後は除染作業という“仕事”ができて助かりました」と。除染する側はお金のために作業をしていて、依頼があれば施設や工場、家の周囲をくまなく調べるそうですが、「ここは人間の住む場所じゃない…」とふと思うそうです。公表されている線量はわずか1メートル脇ではガンッと跳ね上がりますし、吉野さんも示されたように地表と地上1メートルでは全然違います。もしパッドラックでそういった線量の高い空気を吸ってしまったら…、でも見えないので吸ったことすら分かりません。こんなふうに思っている私たちですが、「今日の線量は昨日より少し下り…」とNHKが報じるとその数値を信じてくたして信じてしまう…。不思議なことです。

瓦礫も同様です。被災地で如何に費用を使っている作業が行われているか、例え成果が上がっていないとしても…なんです。瓦礫の廃棄場所も決まらず問題になっていますが、誰もが自宅の庭先は嫌です。最後には政治判断だと思いますが、この問題に関しても、解決の糸口はまったく見えていないと思っています。

吉野 収束していると思っている福島県民は一人もいないですね。根本的に考えても、

私たちが自然線量以上の放射能をほんの少しでも多く浴びるいわれはないはずです。0.05 だったものが 0.06、0.07 になったとしても、ただ福島に居るだけでそれを受け入れるいわれはない。何故、今「年間 20 ミリ」と言われているのが分かりません。

除染の問題もそうですが、事務所がある渡利地区は線量が高い場所として有名ですが、仮置き場も決まっています。と言うか、決められない状況にあります。2 万人以上が暮らす住宅地ですが、自宅の庭先を掘って埋められる人ばかりではありません。庭がない人たちは掘った砂をどこに置くのか？ 自分の敷地内に置く事が決められていますから、それは勝手口の横かも、玄関の横かも、また門の横かもしれません。しかし隣家からの距離の方が近ければ隣家との話し合いになります。一軒一軒が中々決められませんが、それを決めなければ「地区の除染」はできない。遅々として進んでいませんし、計画通りに進むとは思えません。その上、除染したからといって元通りになる訳ではない。まったくもってジレンマですが、子どもたちが直接触れる砂が汚れている訳にはいかない。やらないといけなくは、できない。この繰り返しなんです。そういった意味でも収束になど至ってはいませんし、これが現場の気持ちなんです。

司会 福島第一原発の過酷事故は終わっていない。というより、今後ますますその深刻さが明らかになっているはずです。私たちは福島とどう向きあっていくのか、また、何ができるのか、今日はあらためてそのことを考える機会となりました。吉野裕之さん、阿部泰宏さん、ありがとうございました。

(2012 年 6 月 2 日)